

『 坂上田村麻呂 とは 』

はじめに

昨年は「前九年の役・後三年の役」について発表させていただきました。ただし、この源頼朝の祖先が東北・奥羽の覇権を奪い取ることを目論むも、果たさなかったのですが、それを遡る、二百年前に蝦夷（えみし）を征夷大將軍として征討した坂上田村麻呂は“平安時代前期の巨人”と称しても過言ではないかと考えるようになりました。

1. 坂上田村麻呂の生涯

田村麻呂は、武官の坂上苺田麻呂の三男として、天平宝字2年（758）に誕生。弘仁2年（811）に没した。享年54歳。母親は不明。平安初期に何故、生年が判明しているかという点、官位が三位以上は、墓伝といい、そこに掲載されているのである。

別紙1.の通り、田村麻呂の12代前は「漢高祖皇帝」となっており、渡来氏の家系で、田村麻呂の兄弟は官位も高く、姉は桓武天皇の後宮夫人にもなっている。

田村麻呂は蝦夷（えみし）討伐の征夷大將軍となり、降服させたことで、後世に名を残した（後述）。

京都清水寺の創建に関与しています（後述）。

また「薬子の変」でも、その終息にも寄与していました。

（後述）。その翌年5月23日、京都市粟田（京都市左京区）で54歳の生涯を閉じた（家系図は別紙1をご参照）。



坂上田村麻呂画像
（京都清水寺 蔵）

2. 桓武天皇との関わり

第50代桓武天皇（737-806）は、父は光仁天皇、母は高野新笠（百濟系）で渡来系の天皇である。

桓武天皇は平城京から長岡京、そこから平安京に遷都した事と、征夷（蝦夷征討）で知られている。

渡来人の登用をすすめ、坂上田村麻呂（後に大納言に昇進）・菅野真道・和家麻呂の三人が朝廷に列した。これより渡来系氏族の公卿は前にも、以後もない。

田村麻呂については、征夷大將軍に抜擢され、姉（全子）が桓武天皇の女御に、娘（春子）も女御に入った。

本件に関係ないが、皇籍を離れる桓武平氏はこの時代に発生したのである。

3. 蝦夷（えみし）征討

(1) 蝦夷とはなにか

蝦夷とは、国家側が東北地方の住民に対する呼称として使用されたものであるが古来からの蝦夷は「エミシ」「エミス」「エビス」、そしてこれとは別に“毛人”エミシとして詠んだ。

蝦夷は“海老のように腰の曲がった醜い野蛮人”との意味合いがあり、彼らが国家に対し容易に服属しない「まつろわぬ民」であったからとする。

この蝦夷の呼び名は平安時代で終わり、同語でエゾと呼ばれるようになったのは、北海道の称されることになった明治2年（1869）までは蝦夷地（エゾチ）とされ、アイヌが居住していた意味であろう。

要するに華夷思想（中華思想）からきたもので、先住民である民への蔑称であると思われる（別紙2をご参照）。

(2) 蝦夷争乱と、田村麻呂による平定

①「^{かどまろ}砦麻呂の乱」

宝亀11年（780）、伊治公^{これはろのみかかどまろ}砦麻呂が突如として反乱を起こす。砦麻呂はもともと蝦夷の族長であり、中央政府の同化政策に従って、多くの蝦夷をひきい服属していた。しかし、陸奥国按察使の紀広純と牡鹿郡大領の道嶋大盾との折り合いも悪く、殺害し多賀城を襲撃したのである。中央政府は鎮圧軍を派遣するも、戦果は上がらず、砦麻呂の行方は判らずじまいとなった。

②度重なる朝廷側の蝦夷征討は失敗を重ねる。

上記の砦麻呂の乱以来、蝦夷の抵抗は激しくなっていた。とはいっても、もともと東北は蝦夷の天地である。大和の軍勢が一方向的に進攻を重ねてきていたのであった。天応元年（781）、光仁天皇が退位し、桓武天皇が即位。

鎮圧の軍勢を差し向けるも、いずれも失敗に終わる。延暦7年（788）に^{きのこきま}紀古佐美が征東大使に任じられ、蝦夷の本拠地胆沢（岩手県奥州市）への進攻を数万の軍勢で攻めても蝦夷の勝利が重なる。

③「阿弭流為の戦い」、そして降服……。

蝦夷の族長・阿弭流為は、大和の軍勢5万2千人に対し、僅か数千人の兵で対抗し、大和軍を撃破したのである。

延暦10年（791）、征東大使に大伴弟麻呂、同副使に坂上田村麻呂らを任命。なお「征東」は延暦12年（793）2月、「征夷」に改められた。

大和軍は翌年、進攻を開始し、この時の軍容は兵士10万人の大規模なものであった。

田村麻呂は、阿弭流為の戦いで指揮官の能力を認められ、延暦15年（796）10月、鎮守府將軍となり、翌年11月には征夷大將軍に任ぜられた。

その後、延暦20年(801)、田村麻呂は4万の軍勢をひきいて東北へ赴く。この戦闘では胆沢(岩手県水沢市)から志波(岩手県盛岡市)にかけてほぼ制圧した。翌年、胆沢城、そしてその翌年には志波城を築き、築地に囲まれ、政庁を置き、前線基地の役目を果たすものであった。

田村麻呂はただ武力で制圧するのではなく、平和的共存を作りだすことに腐心し、蝦夷達の生活安定に尽力したのである。

翌年の延暦21年(802)4月、阿弋流為と副将の母礼は同族500余人を引き連れ、田村麻呂に投降してきたのである。同年7月、阿弋流為等は田村麻呂に伴われ同族500余人と入京する。

田村麻呂は朝廷に「故郷に返し、蝦夷社会の統治業務に活用したい」と申し入れ、除名嘆願したが、公卿達は「彼らは獣心で、もし奥地に許して返せば、虎を養って野に放すようなもので患いを遺すようなもの」として、大墓公阿弋流為と盤具公母礼の二人を河内杜山で処刑させたのである(二人の碑が、京都清水寺にあります。(華夷思想「中華思想」は別紙2ご参照)。

4. 京都清水寺創建に関与した田村麻呂

古来より日本の中心地として栄えてきた京都には、歴史的建造物が多々あります。その中でも「清水寺」は長い歴史を持つ寺院です。

歴史事典には坂上田村麻呂が当寺の創建に関係しており、「法相宗の寺」として田村麻呂が延暦17年(798)に延鎮を開山として建立とされています。

『清水寺縁起』や『今昔物語』には宝亀11年(780)とされており、賢心という僧(後に延鎮と改名)が夢のお告げで、「此の草の庵いざりに堂を建てるべき。此の前の林をもって観音を造り奉りべき」とのことだったが、田村麻呂が妻の病氣快復のため、鹿の生血を飲ませたく殺生したことを賢心に話をし、懺悔して、堂宇建立に賛同。妻高子は人々に勧めて「金色の八尺の十一面観音像」を造り安置したとされている。(清水寺の「阿弋流為・母礼の碑」は別紙3ご参照)

5. “薬子の変” 解決にも寄与した田村麻呂

藤原薬子は桓武天皇の寵臣・藤原種継の娘で、のちに藤原縄主ただぬしと結婚、三男二女を設けた。長女が桓武天皇の皇太子安殿親王(のちの平城天皇)の後となった。

ところが薬子も女官として宮殿に仕えたのである。そればかりか、安殿親王に取り入り、ただならぬ関係となり、桓武天皇はこの醜聞に激怒し、薬子を宮殿から追い出したのである。しかし、桓武天皇は大同元年(806)、70歳で崩御。

安殿親王が即位し平城天皇になると、薬子は女官長として宮中に戻った。兄の藤原仲成と共に勝手な行動をし、周囲は不快な思いをしていたのである。

天皇は病弱な為、大同4年(809)、弟の神野親王(嵯峨天皇)に譲位する。大同5年(810)になると、天皇譲位後、上皇は皮肉にも健康を回復したことから、平城遷都を発した上皇に仲成と薬子は加担する。嵯峨天皇は遂に決断す

る。仲成は佐渡権守に左遷し、薬子は宮中から追放とした。

上皇は東国に向け平城を発つ。嵯峨天皇は坂上田村麻呂に上皇討伐を命じ、田村麻呂は精兵を率いて美濃より上皇一行を迎え撃つため出発。宇治にて仲成は射殺される。大和国越田村（奈良市北之庄町）に至り、上皇一行は捕らえ、平城京に戻ることになる。上皇は剃髪入道し、薬子は毒を仰いで、自ら命を絶ったのである（「薬子の変」の関係図は別紙4ご参照）。

その後、坂上田村麻呂は平安京郊外栗田（京都市左京区）の別宅で病の身を伏せていた。そしてついに、翌年の弘仁2年（811）5月23日、54歳の生涯を閉じた。

嵯峨天皇はその死を悼み、「事を視ざること一日」と喪に服し、漢詩一篇をものし、田村麻呂の業績をたたえ、その死を惜しんだと言われている（『田邑麻呂伝記』）。そして同27日に、坂上田村麻呂の遺体は甲冑・兵仗・剣・鉾等を身につけ、立ったまま、東（陸奥）、平安京に向け、天皇を守護するよう埋葬されたといわれています。

6. 坂上田村麻呂の伝説

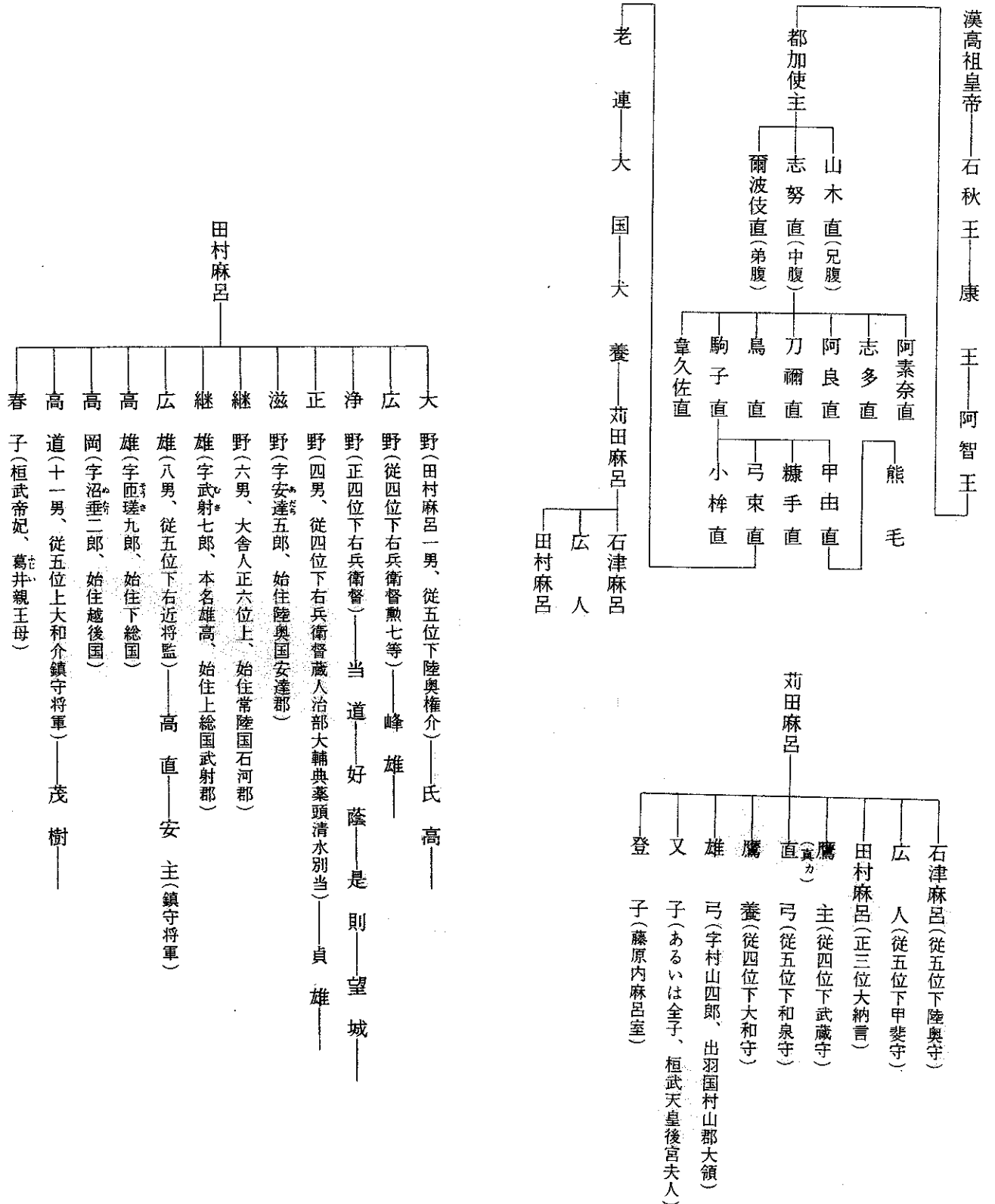
- (1) 田村麻呂は蝦夷で生まれた？
- (2) 黒人説？
- (3) 田村麻呂は暗殺された？

参考文献

人物叢書坂上田村麻呂	高橋崇	吉川弘文館
闘乱の日本古代史	松尾光	花鳥社
田村麻呂と阿弼流為	新野直吉	吉川弘文館
熊野鬼伝説	桐村英一郎	三弥井書店
阿弼流為	樋口知志	ミネルブバ書房
阿弼流為と東北古代史	熊谷公男	高志書院
続日本紀考証	村尾元融	図書刊行会
内戦の日本古代史	倉本一宏	講談社現代新書
平安貴族	橋本義彦	平凡社選書
大学の日本史・古代	佐藤信	山川出版社
戦いでたどる古代日本史	中江克己	PHP 研究所
桓武天皇と平安京	井上満郎	吉川弘文館

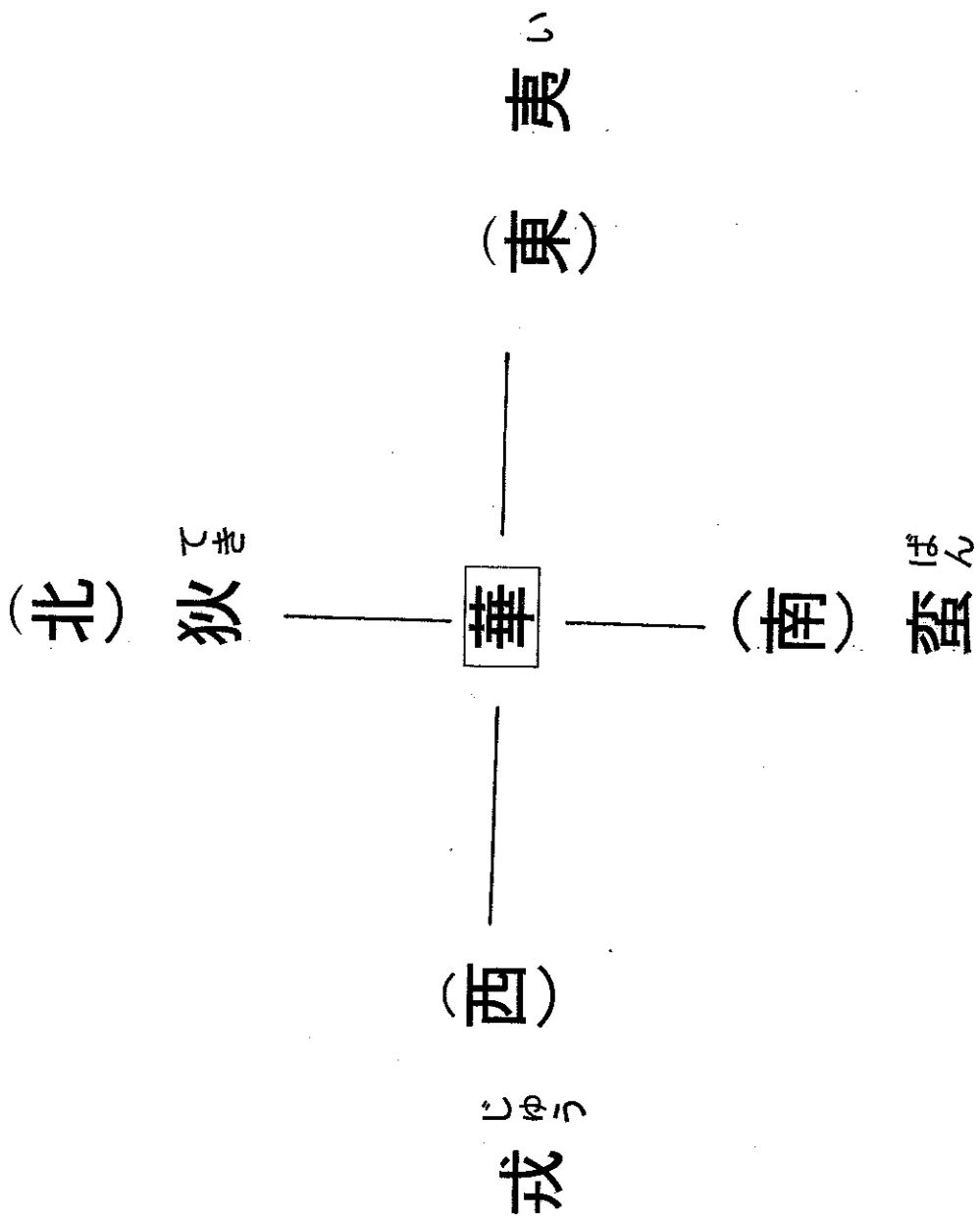
完

別紙 1. 坂上家系図



別紙2. 華夷思想（中華思想）図

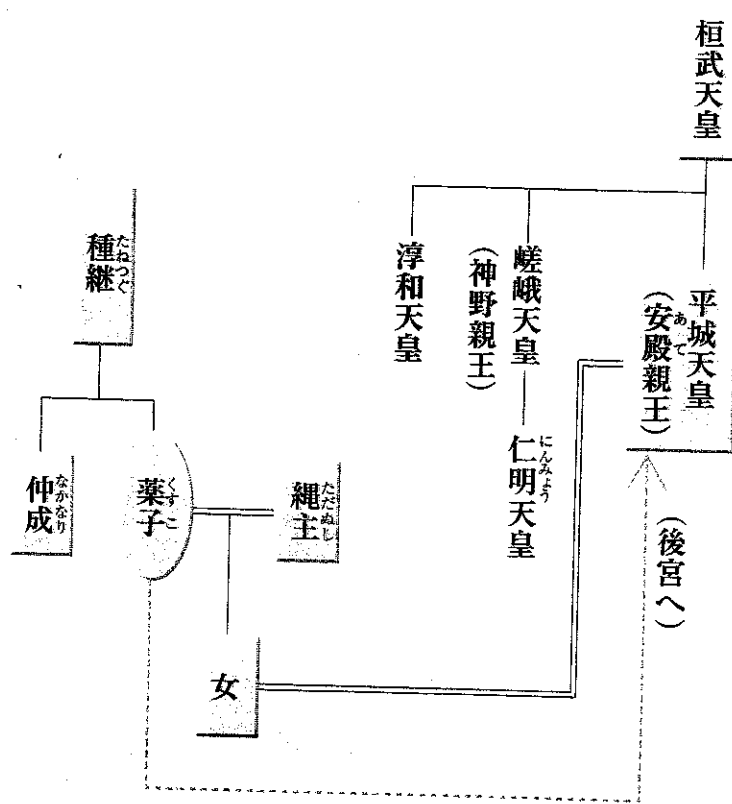
『^か華^い夷思想』



別紙3. 清水寺にある「阿豆流為」「母礼」の碑



別紙4. 「薬子の変」関係図



中枝克己著『戦いでたどる古代日本史』より一部転載